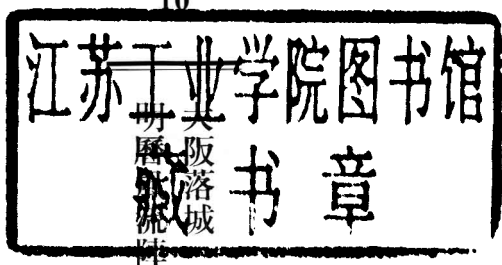


直木三十五全集

10

直木三十五全集

10



示人社

直木三十五全集第10巻

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発行所 東京都文京区水道一―九一―
株式会社 示 人 社

郵便番号 一一二

電話 東京三八二二―四一三

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 イワサキ・ミツル

装幀

落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第10巻（昭和9年12月14日発行）を用いた。

第十卷 目次

大 阪 落 城

秋風星落桃山城

反古起誓

利家逝く

奇謀深謀

落ち来る物

宇喜多騒動

前田の降伏

俠勇直江山城

動揺

關ヶ原合戦

明 曆 風 流 陣

まへがきのこと

これも氣質

三

六

一五

一五

一九

二三

三四

三四

三五

三五

三七

三七

青龍白虎
男がみじめか
空鈍流祖
女身流轉
相寄る武士
血吹雪
一樹の蔭
嵐
浮浪窟
石火相打つ
風満つ
逆風
黒風白雨
横轉逆轉
施刀
遊行寺時雨
香具師濫觴

三八七
三九六
四〇五
四一四
四二二
四三三
四四三
四五四
四六二
四七〇
四七九
四八七
五〇〇
五一二
五二五
五三一
五四三

大阪落城

秋風星落桃山城

一ノ一

(わしも、今度は死ぬか知れぬ)

今見た夢の中の恐怖が、まだ心臓の邊に、うづいてゐたし、頭のうしろの方に、淀んでゐた。そして、その夢の中で、恐怖に戰慄してゐた時と同じやうに、死の暗黒さと、絶望さを感じた。

(わしが、死んだなら、お拾ひ——秀頼の事——は、どうなる?)

秀吉は、今まで、如何なる時にも、自分が死ぬ、といふやうなことを、こんな恐怖心と、絶望とで感じたことはなかつた。

(あれは、夢だ)

秀吉は、心の中で烈しく頭を振つて、夢の中の記憶と、光景とを、振り拂はうとしたが、灰色の中の陰惨な有様は、頭の壁へ、刻み込まれたやうに、明瞭としてゐた。

灰色の——何處ともわからぬ世界の中に下げ髪の幼い児が一人——その後ろ姿を見ると、秀吉は

(あゝ、鶴松が——)

と、感じた。

(今時分、鶴松が、どうしてこんな所に、只一人で——鶴松は、死んだのではないか——すると、ここは——冥土であらうか?)

秀吉が、冥土であらうかと、感じると同時に、そこは、淋しい、廣い河原になつて、幼児は、向うむいてしやがんで、石を積み重ねてゐた。

(あゝ、賽の河原)

さう思ふと、鶴松を亡くした時の悲しみが、毒焰のやうに、胸の中へ、噴出してきた。

(わしの子が——關白の子が、たつた一人で、こんな賽の河原の淋しいところに)

秀吉は

「鶴松よ」

と、呼びかけて、急いで近づいて、抱上げようとすると、それは、鶴松でなく、秀次の妾の子の中の一人であつた。

(あゝ、お前か)

秀吉は、鶴松でなくてよかつたと感じて、胸苦しさが薄らぐと——そこは、賽の河原ではなく、秀次の愛妾、三十何人を斬つて、畜生塚を築いた、三條の河原であつた。

(可哀さうに、お前一人ぼつちで——お前は、わしを怨むかもしれないが、それは、お前の父の秀次が悪いからだ——わしは、お前が、可愛い——よし、お前を連れて戻つて、お拾ひの近習にしてやらう)

秀吉は、さう思うて

(秀次への、罪亡ぼしだ)

と、幼児の側へ近づくと、幼児は、秀吉を振り返つて、恐怖の眼をかゞやかせると、立上つて、逃げようとした。

(可哀さうに——わしは、お前何もせんぞや)

秀吉は、やさしい眼を、一層やさしくして手を差し伸べると——子供は、一人の女に抱かれて、秀吉の顔を、睨みつけてゐた。女は、髪を振り亂して、跣足のまゝ、裾を亂して——秀吉は、それを見ると

(うぬ、秀次の妾風情が——余を怨まうなどと——)

佩刀へ手をかけて睨みつけると、その女は、怨恨と、闘

争つて刺出した眼で、秀吉を睨みつけて

「この子を殺すぞ」

と、いふやうな態度を示した。その瞬間、幼児は、お拾ひになつてしまつて、女の手の中で、逃げようと、もがきつゝ、秀吉に、救ひを求めてゐた。秀吉は

(おのれ)

と、全身で叫びつゝ、女へ飛びかゝらうとすると、女は淀君であつて——いつの間にか、そこには、顔色の蒼ぐろい、瘦せた秀次が、淀君と、秀頼とを捕へて、眞暗な中へ、追ひ込まりとしてゐた。そこは、三條の河原ではなく、四方とも、暗黒な——そして、一足、淀君が踏出せば、そこには、底知れぬ谷があるやうに、秀吉には、感じられるところであつた。

一ノ二

さういふ不吉な、恐怖を感じる——それからまた、自分の死後のことを考へさせ、秀頼の行く末を心配するやうな——そんな種類の夢など、決して見たことのない秀吉であつた。夢に見るよりも考へたことさへもない——自分が死

ぬなどといふやうなことは、一度も、感じたことのない秀吉であつた。だが――

秀次に追はれて、悲鳴を上げながら、逃れようとする淀君と、秀頼――秀吉は、絶望と、怒りと、恐怖に、全身をふるはせつゝ

「誰か、早く」

と、叫んだ。自分のうしろには、家康も利家も、清正も、正則も居ると感じてゐたので、それらの人々に

「お拾ひを助けてやれ」

と、絶叫して、自分は佩刀へ手をかけて――だが、誰一人出て来ないし、手も、足も動かないし――そして、淀君と秀頼とは、その漆黒の宇宙の中を、遠くへ、遠くへ――秀吉は、自分のうしろに、充滿してゐて、それを眺めてゐながら、誰一人、助けに出ぬ家康に、激怒を感じつゝ

「お拾ひ」

と、叫んで、全身の力で、飛びついて引き戻さうと――動かぬ足に、力をこめて、遠くの二人の姿へ、猛獸のやうに、跳りかゝらうとした時、二人は、闇黒な大きい穴の中へ墜ちたらしく、だんだん小さく、小さくなつて行くのが

見えた。そして、いつの間にか、秀吉は、その穴の縁に立つて、墜ちて行く二人を眺めながら

(豊臣の家も、これで――)

と、感じた時、自分の立つてゐる崖が、穴の中へ崩れ出して、秀吉は全身の肌に、恐怖の寒さを感じた。そして

(死ぬ)

と、突きのめされるやうに、死を感じた時、夢が醒めた。寝てゐる臺――高さ一尺五寸、幅四尺餘り、長さ八尺ばかり、猩々緋で張りつめて、枕の下には、銀の鯉の彫刻を、金の延べ板に嵌めた物が、取りつけられてあつて、臺の四方は、高蒔繪をして、五三の桐が、山樂風の山櫻の中に、散在してゐた。その臺から、片足が、落ちかかつてゐた。

秀吉は、これまでに、いくつかの死を見た。それは人間といふよりも、血と、泥とでこね上げた塊のやうに感じられる戦場での屍。眼險に血をため、白眼を血に染めて、三倍程にも大きく剣出した眼球。刀で切られたとは思へぬやうな、その大きい斬り口から脳漿を食み出させて、髪と血との膠着してゐる頭。秀吉は、それを見ても、死に對しての恐怖は決して、起らなかつたし、自分が、さうなるか

知れぬ所にある、といふことも決して感じなかつた。そして、立つてゐる間近の所へ、矢が羽をふるはせて立つたり、脚下へ、弾が、小さい砂煙を立て、射込まれても

(わしのやうな人間は、天が殺さん)

と思つた。竹筒の底に残つてゐる水を、口の中へ滴らしてやると、満足と、感謝とに、歪んだ微笑を、唇と、頬へ浮べて、眼を閉じた兵、さうして、生から死へと移る兵の表情を見てゐても、それと同じものが、自分へ來るとは、決して考へなかつたし、齡は下であるが、自分の大切な智恵袋であり、友人であり、先生であつた竹中半兵衛が死ぬ時にも、その脂氣の無くなつた、瘦せた、冷たい手を握つて、その死の色に隈取られてゐる眼が、だん／＼閉ぢて行くのを見て

(これが死か)

とは知つたが——そして、自分も、何れ死ぬものだとわかつてゐたが、それでも、自分だけは、決して死ぬものでないやうな氣がしてゐた。六十少し前に、大思ひをした時にも、死は感じなかつた。それが、今夢を見ると共に

(死ぬかもしれない)

と心の底から、立ちすくむやうに、死の恐怖と、死後の驕臣への不安とを感じた。

一ノ三

「お孝」

秀吉は、孝藏主を呼んだ。

「はい」

孝藏主は、剃り立ての頭に、白麻を着て

「お眼覺めになりましたか」

山樂の描いた「淀の川瀬」の屏風。厚い金地は、豪華な群青の川波で、盛りつぶされ、その上に垂れかゝつてゐる緑青や、白緑の柳の葉。金と、朱とを混ぜて描いてある水車。——明るい心で、明るい陽の下で、それを見ると、その豪華さと絢爛とに、憑かれるやうな屏風であつたが——かうして、薄暗い、燈臺の光に——尼法師のうしろに——瘦せて、くろずんだ顔をしてゐる秀吉の枕下に立てられてあると、それは、もう、山樂の魂を、精を失つてしまつたものゝやうに、空疎に見えてゐた。

「お孝——わしは、死ぬ」

秀吉は、金箔を塗り、金金具を打ちつけた椿天井に、冷たさを感じながら

「目立つて瘦せた」

と、云つて、頬を撫でた。

「何を仰せられます」

孝藏主は、金時綱で、五三の桐を散らしてある柄の高燈臺を、少し、片よせて、秀吉へ一膝近づいた。

「いゝや——わしも、もう、六十三になつた——」

さう云つて、寢返りしようとする、いつもの咳が、烈しく出てきた。孝藏主が、背を撫でると、典醫の一人が、すぐ、藥湯をもつて出てきた。

秀吉は、身體中から出てくるやうな烈しい咳を、しばらく續けてしてから、そのまゝ、枕を抱いて、横になつて了つた。

常から、瘦せた手であつたが、鶴松を亡くした時に、目立つて瘦せて、今度わづらつてから、またその上に瘦せたらしく——そして、汚い、硬い皺の上に、しみが出てきたり、小さい斑點が、いつの間にか、現はれてゐたり——もう、死が、秀吉の何處かに、潜んできてゐるやうに、孝藏

主には思へた。

「死ぬ、今度は死ぬ」

秀吉は、低く、呟いて、また夢のことを考へた。

（お拾ひのために、ちゃんとしておいてやらぬと——あの夢の中のやうに、家來といふやつは、當にならぬ）

さう思ふと、部屋の中の、豪華な調度や、敷物や、屏風までが、いつもとちがつて、冷やかな色をしてゐた。世の中で、自分に背かぬ者は、自分の血を分けた子と、その母だけのやうな氣がしてきた。夢で見たやうに、たゞ三人だけが、生死を共にする仲で、外の人々は自分が亡くなれば、二人に何をするか？——秀吉は、夜中で——人々が眠つてゐるのを知りながら

「お拾ひは？」

と、聞いた。

「お眠みになつてをります」

「茶々——淀君のこと——は」

「お起し申しませうか」

「今度はいかん」

「いゝえ、そんな——伏見の者も、京の者も、天下様のお

病、よくなりますやうにと、祈つとります。早うようなつて、又、花見でもなされませ。今度は、紅葉狩りが、よろしゆうござりませう」

「お拾ひは、よく寝てをるか」

「はい、よく、お眠みになつてをります」

「せめて——お孝——わしは、あれが、二十になるまで、生きてをりたい。お拾ひが二十になりや、死んでもよい、今度は死にたうない」

孝藏主は、いつ、いかなる時にも、こんなことを云つたことの無い秀吉が、さういふことを云ふので

(もしかしたなら、お亡くなり)

と、思ふと、秀吉の眼の下、くろずんだ色になど、もうすつかり死が忍んでゐるのではないかと思へた。

「治部——治部を呼べ」

と、秀吉が、云つた。

一ノ四

孝藏主が、宿直の人に、石田三成を呼びにやつて、また、座へ戻ると

「いつぞや、わしの辭世を、お主に、あづけたなう」

「はい」

「あれは——」

「大切に、納めてござります」

「ちがふ、さうではない——」

秀吉は、聲を失らせて

「あれは、どういふ歌であつたかの。わしは、病氣してから、物覚えが悪うなつたし、疳が高ぶるし——今度は死ぬ」

「いゝえ——」

「死ぬ、と申したら死ぬ」

秀吉は、叱るやうに云つた、孝藏主は、こんな機械の悪い、愚痴ばかりを、繰返し、繰返し秀吉を見るのは、始めてであつた。どうして、こんなに變つたかとおもふ位に、いつもの、快活な潤達な、秀吉ではなくなつてゐた。

「どういふ歌であつたか、申せ」

「はい」

露とさき、露と消えぬる吾身かな、浪花のことは、夢のまた夢

「夢つ」

秀吉は、大きな聲でいふと、咳込んだ。又、夢の中のとが、頭の中も、胸の中も、しめつけるやうに、蘇つてきた。

「まことに、よいお歌でござります」

さう云つた時

「御免」

低い聲がして、石田治部少輔三成が、白綾の袷小袖の上へ薄い羽織をかけて、入つてきた。

「治部か」

「はい」

秀吉は、眼を閉ちて、蒲團の外へ、瘦せた兩手を突出して、合掌しながら

「わしは死ぬ——今度はいかん」

「何を仰せられます」

「いゝやいかん——治部」

「はい」

三成は、瘦せ枯れて、常から、色の黒い秀吉が、老年と、病との上に——何かそれ以外のものと醜い、濁つた色の加はつた頬を、頭を見つめながら

（お亡くなりなさるかもしれぬ。醫者も、餘程難かしい思つてゐるらしいが——）

と、思つた時

「わしは、秀次に、日本の四つをやつて、秀頼にはその一つだけやつて——それでも、お拾ひさへ成人してくれりや、それでよいと申した——何んにもいらんから、お拾ひが、すく／＼と、大きく成つてゐてくれさへすればよい——わしは今、夢を見た。秀次が、お拾ひを殺さうとしてをりくさるで、家來に、助けいと申したが——治部、誰一人、助ける者がをらん。一杯、わしのうしろにをつたのになう。夢の中ちやが、確に、みんな居つた。見えなんだが、居つた。それに、お拾ひが穴の中へ墮て行くのを、救ひやらん。こりや夢ではない。治部——わしが、生れて以來、さういふことを、幾千、幾百見て來たか？それが、世の中ちや、世の中の人間は皆さういふもんぢや、夢ではない——決して、夢とおもうてはならん」

秀吉、そこまで喋ると、疲れたらしく、藥湯を一口のんで、夜具の中へ、顔を入れてしまつた、二人は（お泣きになつてをるのではあるまいか）

と、おもつた。

（子供の爲には、天下様ともあらう人でも、かういふやうに、お成りなされるものか）

秀頼の前に生れた子、鶴松が死んだ時、秀吉は坊主になつた。だが、すぐに、氣を取直して、朝鮮を征伐することによつて、鶴松の死を忘れようとした。

そして、それが、忘れる頃になつて、秀頼は、六歳となり、可愛い盛りになると共に、自分が死ななくてはならぬことになつた。同じ子に別れる悲しみ、苦しみではあるが

「天下」

三成は、秀吉のすゝり泣きを聞くと共に、手を延ばして、秀吉の肩へ當てた。

一ノ五

「誓文を書かさう、誓文を——」

薄く、涙に濡れた眼——それは、いつも、上段から、大きい聲で、人々に呼びかける時の秀吉の眼ではなく、吾子の爲に、必死のものがきをしてゐる一老人の苦惱の眼であつ

た。三成は、屏風の外の人へ

「料紙と、硯」

と、聲をかけながら

（誓紙、起誓の類を頼むやうな人ではなかつたが——病でほゝけて來られたが、秀頼可愛さに、せめて、さういふ物でも書かせて、氣安めになされようと云ふのか——藥すべに縋らうとなさるお心——）

三成は、何十枚、何百枚の誓文血書が反古になつたかを、十分に知つてゐた。そして、曾て、人にさういふ事を書かした事の無い秀吉が、三成以上に、さういふ物の無効であるといふことを知つてゐながら、それを書かうとする氣持——「治部、お孝——わしは、お拾ひの命にさへ、つゝが無けりや、大和一國、山城一國の主人でもよい、人間、器量さへありや、天下は又取れる。命が無くなつては、何んにもでけん——あれが、女の子なら、わしは心配せん。茶々に似よつて、よい器量ぢやからなう。茶々のやうに、仕合せ者に成るか知れんが、男の子ぢやから——男の子は、必ず殺されるからの。——よいか、さ、書いてくれ」

三成は、胸を締めつけられるやうになりながら

「まづ——敬白靈社上巻起請文前書之事」

「あゝ——」

秀吉は、枯れ竹のやうな手の指を動かして

「文句は、玄以やなんぞと、ちやんと致してくれ。一つ——」

私の意恨を挟まんこと——治部は、虎の助——清正のこと

——など、仲悪るぢやが、お拾ひの爲に、何事も耐らへて

くれ」

「手前よりは、一度も仕かけたることではござりませぬが、

此後とも、十分耐へて、秀頼様の爲には何事でも、忍びは

仕ります」

「それく、お孝、よう聞いておけ。政所にも、茶々にも、

お拾ひ大事とおもはゞ、至み合はんやうにと、よくく申

してくれ」

「はい」

「それから、徒黨を立てるな、公事、喧嘩口論一切しては

ならん——擬て仕置方は、この誓文した者が相談して相究

めること——それから——」

秀吉は、それまで云つて、暫く、黙つてゐたが

「かやうな起誓でよいかの。よい工夫が、無いか」

「起誓をなさる衆は？」

「それぢや、大納言——前田利家——内府——徳川家康

——ぢやろ、それから、毛利、上杉、宇喜多、徳善の坊主、

長束、増田、淺野——その方——これで、十人ぢや——こ

の十人でよからうがな。大納言、内府——」

秀吉は、又、指を繰つた。そして

「大納言は、わしより二つ下か」

「六十一歳にならせられます」

「内府は——五十——」

「七歳でござります」

「あいつ、まだ五十七か——わしの齡になるまで——七、

八、九」

秀吉は、指を繰つて

「七年もある、七年も——」

「天下——先刻、仰せられました、器量があれば、天下は

とれるとの御言葉、又、秀頼君存命ならば、大和一國でも

よいとの御言葉——」

「殺されるよりはよいと申すのぢやが——起誓の文句を、

玄以と相談して、すぐ作つてくれい——わしは、いつ何時、

死ぬかもしれん。この邊が、苦しいし——」

秀吉は、胸を押へ、又、咽喉を押へて

「こゝも苦しいし——今度は、いかん」

三成は秀吉の周圍に、豊臣の家の周圍に、暗さの迫つてきてゐるのを、しみじみと感じてきた。

二ノ一

山の鳥、野の鳥——鴨、雁、山鳥、うづら、鴨、百舌鳥、

つぐみ——さういふ鳥が、狭い軒下一杯に、ぶら下げられ

て、白い眼を閉ぢてゐた。その奥には、紐につるされた雀

が、幾十羽となく、天井から下つてゐる紐から、縄から縄

へ綱渡りのやうに——新しい小屋立ではあるが、その小

鳥の下で焚く、焚火のほてりに、もう天井の黒ずみかけて

ゐる鳥屋。

親爺が、砂埃と、馬糞の埃との入つた醬油へ、剣身の小

鳥をつけて、脂に、ぼつぽと燃え上る炭火を眺めてゐると、

女房は、強飯餅を焼きながら、店先に、腰をかけて、土器

の中の小鳥を、指でつまんで、かり／＼音立てゝゐる人々と、話をしてゐた。

弓師の弟子は、折烏帽子の昔風のまゝ、手車の人足は、
褌一つで——その中に、小袖の侍、布子の足輕が、そ
れぞれ頭丈な刀を、側へ置いて

「いよく、天下様も、むつかしいとな」

絹商人らしい、風體のいゝ男が、赤檜柄の脇差をさして

「どうなりますやろな、もしもの時には？」

「さ——どうなるやら」

親爺が、土に

「小竹様は、佐渡様——本多正信のこと——の御家來衆ゆ
ゑ、その邊、よく、御存知でござりませうがな」

「わし共にわかるか」

「天下様も、こゝでは、申せんが、關白様を——秀次——
お殺しになつてから、とんと、御以前のやうでないからの。

朝鮮征伐で大物入り、こゝのお城で、大物入り——商人も、
百姓も、それ金、それ米で、へと／＼ぢやで、儲けとるの

は、こゝの親爺ばかりぢや」

「何をおつしやる——然し、こゝには、豊臣衆がござらぬ
ゆゑ、云へますが——お拾ひ君は、子供ぢやし、まづ、内

府の御後見で——」